

一次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

キャッチボールをするときのことを想像してみてください。キャッチボールは、相手を打ち負かすためではなく、相手とのボールのやりとりを続けることが目的です。だから、互いに相手がボールを無理なく受け取れるようにするのがふつうです。

もし、①あなたが高校の野球部の生徒で、野球をはじめて間もない近所の小学生とキャッチボールをすることになったらどうでしょう。日頃、部活でするのはかなり違ったやり方をするのではないですか。

まず球を投げるときには、ゆっくりとしたスピードで、相手が捕りやすいところ、ちょうど胸のあたりに投げようとするでしょう。距離も、相手が捕りやすく、また相手の球が届くあたりにしないとけません。さらに、相手の能力や性格によっても、投げ方を変える必要があります。初心者でも運動が得意で積極的な性格の子なら、少し速い球を投げてみるのもいいかもしれません。反対に、運動が苦手で自信がない子なら、はじめはできるだけ②カンタンに捕れる球を投げるほうがいいでしょう。また、そのときの状況も関係してきます。塾に行くまでのちよつとした時間のキャッチボールなのか、日が③グれるまでずっとやっていたのか。それによっても投げ方やキャッチボールのやり方自体が変わってきます。

実際には、これらを一つひとつ確認しながらキャッチボールをすることはしないでしようが、よく知ってる子が相手なら、理屈は抜きに、あなたは瞬時のうちにこうしたことを感じ取って対応の仕方を変えるはずですよ。

言葉のやりとりもキャッチボールと同じように、受け取る相手に応じて表現や手段を変える必要があります。そうすることで、

④ というボールが ⑤ の心というグラブに収まります。

しかし、言葉にはさまざまな伝達手段があり、相手が目の前にいるとは限りません。そのため、とくに文書で何かを伝えようとするときには、途中までは読み手のことを考えていたのに、書くのに ⑥ 「A 苦 B 苦」しているうちに、つい忘れてしまう

ことがよくあります。

あるいは、すらすら書けたと思っても、読み直してみると内容が相手の知りたいことからはずれてしまっていることがあります。例えば、修学旅行に参加できなかったクラスメートのA君のために報告書を書いてあげたとします。そこには、みんながホテルや遊園地でどんなに楽しく過ごしたかということばかり書いてあって、A君が一番知りたいと言っていた会社見学のことが全く含まれていなかったら、⑦ A君はがっかりするかもしれません。

書いている当人は一生懸命だったのですが、いつしか受け取る側が求めているものを意識するのを忘れてしまい、代わりに自分がおもしろかったこと、自分が言いたいことばかりを書いてしまって、ひとりよがりの文章になっていたのです。これは、⑧ キヤツチボールで言えば、相手は練習のためにいろいろな球種を受けてみたいと思っっているのに、自分は、自信のあるストレートばかり投げて喜んでいるようなものです。

社会では、問い合わせや依頼書やお礼状などの文書が、日常的にたくさん使われています。それらの文書は、ただ相手に渡して読んでもらえばよいのではなく、その内容を相手に理解してもらって、初めて目的を達成する性格のものです。

そこには必ず読んで理解してもらいたい相手があります。それは不特定多数だったり、一面識も親交もない個人だったり、あるいは親しい人だったり、時と場合によってさまざまです。

学校で書く作文や感想文を読む相手は、たいいてい先生です。先生は、文章が読みやすくても読みづらくても、その内容を理解しようとして丁寧に読み、わかりづらければ指導してくれます。それが先生の仕事です。

しかし、社会でやりとりされる文書の読者は、そうではありません。わかりづらかったら読まずに放っておくかもしれませんし、⑨ ゴカイして送り手との間でトラブルになるなど大変な結果になるかもしれません。これはある程度避けられないことですが、できるだけそうならないために、多種多様な読み手に応じて、伝え方、文章の書き方を変えることが求められます。どうしたら相手

にとって読みやすく、理解しやすい文章になるかを考え、相手によって工夫することが必要なのです。

相手に応じて文章の書き方を変えるには、まず、書きはじめる前に相手のことを考えなければいけません。手紙など、相手が特定している場合なら「これを読むあの人はいったいどんな人だったかな」などと⑩アラタめて考えたり、アンケートや記事など、特定できない場合は「どういう人（たち）が読者になるのだろうか」と想像を膨らませないといけません。しかし、どういう人かは、何を基準に考えたらいいでしょうか。

まず、「自分とどういう関係にある人か」という点から考えると、重要なのが相手が目上の人かどうかです。目上の人というのは、先輩や先生、上司、年上の親戚などを指します。目上の人には失礼にならないように、例えば敬語を使うという配慮が必要です。

知っている人かどうか、というのも基準になるでしょう。知らない人や特定できない相手に文章を送る際は、ふつう、目上の人に対して書くのと同じように、敬語を使います。このほか、相手について考える上での基準には、その人が男性か女性か、年齢はいくつか、⑪シヨクギヨウは何か、どこに住んでいる人なのかなど、客観的な事柄だけでもたくさんあります。これに加えて、忙しそうな人とか、繊細な人とか、間違いに厳しい人というように、相手の性格や置かれている状況なども一つの基準になりえます。

⑫文書を書く前には、こうしたさまざまな基準にそって、わかる範囲で相手がどういう人なのかを確認、あるいは想像し、それによって伝え方を変えるのです。

『伝えるための教科書』川井龍介

問一 — 部①とありますが、あなたが高校の野球部の生徒だったとして、近所の小学生とキャッチボールをする時に一番大切なのはどのようなことですか。文中の言葉を使って、二十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問二 — 部②・③・⑨・⑩・⑪のカタカナを漢字に直しなさい。

問三 — 部④・⑤に当てはまる言葉をそれぞれ漢字二字で文中からぬき出しなさい。

問四 「部⑥「A 苦 B 苦」について、部A・Bに当てはまる漢数字一字をそれぞれ書きなさい。

問五 — 部⑦「A君はがっかりするかもしれません」とありますが、A君が満足するような会社見学(工場見学でも良い)の報告書を自分で想像して書きなさい。ただし、**見学した場所、見学した内容、感想を必ず書くこと。**

問六 — 部⑧「キャッチボールで言えば、相手は練習のためにいろいろな球種を受けてみたいと思っているのに、自分は、自信のあるストレートばかり投げて喜んでいるようなものです」とはどのようなことをたとえていますか。四十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れます。)

問七 あとの文章は、女子中学生が小学校の時の担任の先生に書いた、招待状の下書きです。この文章の—部a、b、cを、先生に向けた手紙として適切なものを選び直しなさい。

a 毎日めっちゃ寒いけど、先生、元気？

私は元気です。

b 今度、うちの中学校の体育館で演奏会やるから、来てー。

三月二十日の土曜日の午後一時からです。

c むっちゃがんばるから、絶対聞きに来てよー！

問八 — 部⑫ 「文書を書く前には、こうしたさまざまな基準にそって、わかる範囲で相手がどういう人なのかを確認、あるいは

想像し、それによって伝え方を変えるのです」とありますが、このようなことをしなければならぬのは何のためですか。文中の言葉を使って三十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

このページには問題はありません

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。(本文の表記の一部を変えています。)

〈中学一年の太二が所属するテニス部では、朝練で荒れたコートを昼休み中にブラシでならすのは一年生の役目で、グーパーじやんけんの一発勝負で人数の少ない方がコート整備をするルールになっている。〉

「一」

「おい、末永。早くこいよ」

ぼくがみんなの輪に入りかけた時に武藤がどなって、ふりかえると末永が昇降口から出てきたところだった。長髪を、トレードマークのヘアーバンドでまとめた末永が、長い手足をふって一気にせまってくる。

「太二、パーな」

武藤は小声で言うと、そっぽをむいた。いままで一度もなかったことだが、①みんながなにをしようとしているのかはわかった。やめたほうがいいよ、ということばが口から出かかったときに末永が到着した。

「悪い悪い。給食の後、腹が痛くなってきた」とおくれた言いわけをする末永をしり目に、

「グーパー、じゃん」とみんなが声を出した。

「あつ」

自分だけがグーだとわかり、末永がしゃがみこんだ。うなだれた顔にかかった髪のスきまから、とがらせた口が見えた。「すげえ偶然だな。おい、末永。手伝ってやりたいのは山々だけど、よけいなことをしたら先輩たちにおこられるからよ」

武藤は早口で言うと、さあ行こうぜというように右うでをふった。ぼくは残って末永と一緒にブラシをかけようかとおもったが、久保に肩をたたかれて、みんなにまぎって小走りで校舎にもどった。

たまたま末永がおくれたのかこつけて、武藤がワナをししかけたのだ。もしも末永と同時に到着していたら、ぼくもグーを出していたかもしれない。ぎりぎりセーフと安堵すると同時に、末永がキャプテンの中田さんか顧問の浅井先生にこのことをうった

えたらたいへんだと不安がよぎった。

中田さんはふだんはおだやかだが、一度おこるとすぐには相手を②ユルさなかった。夏休みの練習で、数人の二年生が日かげでサボっていたときにも、自分も一緒にやるからと二年生全員で二百回素振りをした。あらかじめ注意されていたのに、末永ひとりをハメたことがばれたら、どんなばつを与えられるかわからない。

こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないかと、ぼくは後悔していた。でも、聞こえなかったふりをしてグーを出していたとしても、自分だけいい子になりやがってと、みんなの反感を買っていただろう。

久保が武藤についても、ぼくにはシヨックだった。久保は小学一年生からの友だちで、超がつくほどまじめなやつだ。そのぶんかけひきがへたで、肝心なところで相手に裏をつかれる。グーパーじゃけんでもよく負けて、三回に二回はコート整備をしていた。だから、というわけでもないが、ぼくは久保ならこういうときは絶対にとめるだろうとおもっていた。

武藤と末永はプレースタイルがよく似ていた。二人とも百七十五センチをこえる長身で、威力のあるサーブ&ボレーを武器にしている。ツポにはまると手をつけられないが、ベースラインでの打ち合いをやや苦手にしていて、自分のイージーミスからくずれることが多いところまでそっくりだった。

③、武藤が練習熱心なのに対して、末永はすぐに手をぬこうとする。筋トレのときに、末永がまじめにやらなかったせいで、スクワットやうで立てふせの回数を増やされたことも一度や二度ではなかった。④、武藤が中心になってハメたのはたしかに行き過ぎだが、末永にまったく非がないわけではなかった。

そうはいつても、ひとりで四面のコートにブラシをかけるのはたいへんだ。末永の性格からすると、途中で投げ出さないとまかぎらない。それをきっかけに末永が退部したら、⑤後味の悪いことになってしまう。

昼休みの終わり近くに、四階の教室の窓からグラウンドに目をやると、末永はまだブラシをかけていた。かなりがんばったようで、残りは半面だったが、そこで昼休みの終了を知らせるチャイムが鳴りだした。両手にブラシを持った末永は前かがみになって最後の力をふりしぼり、コートの手端にたどり着くなり地面にヒザをついた。



末永は放課後の練習にいつもどおり参加したので、ぼくは胸をなでおろした。今回は大ごとにならずにすんだが、昼休みのグーバーじゃんけんがあるかぎり、こうした問題はくりかえされるのだとおもうと気が重かった。なにより、武藤の言いなりになってしまった自分が情けなかった。練習にも集中できず、ぼくはどうすればいいのかを考えながら家までの帰り道を歩いた。

〈中略〉

〔五〕

やはりキャプテンの中田さんに助けをもらうしかない。そう思ったが、それを思いとどまったのは、昨日から今日にかけて、一番きつい思いをしているのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいっているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないというおそれをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんにたのむとしても、まずはみんなで末永にあやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭に入っていなかったが、<sup>⑦</sup>ぼくはようやく自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうとろうかに出ると、武藤が顔をうつむかせてこっちに歩いてくる。

「よお」

「おっ、おお」

武藤はおどろき、<sup>えがお</sup>気弱げな笑顔をうかべた。そんな姿は見たことがなかったので、もしかすると自分から顧問の浅井先生かキャプテンの中田さんに打ち明けたのではないかと、ぼくは思った。

それなら、昼休みには浅井先生か中田さんがテニスコートにくるはずだ。たっぷりおこられるだろうが、それでケリがつくならかまわなかった。

給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。しかし集まったのは一年生だけだった。ぼくは<sup>らくたん</sup>落胆すると同時に<sup>⑧</sup>自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、<sup>⑨</sup>だれの顔も緊張で青ざめている。末永にいたっては、歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがぴくぴく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況で、昨日はハメて悪かったと末永にあやまったら、どんな<sup>⑩</sup>テンカイになるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがってどうらまれて、末永だって怒<sup>い</sup>りのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふうにグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然、グーパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれて<sup>しゅうしゅう</sup>收拾がつかなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが<sup>⑪</sup>キントウに分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニススクールに通っていたころ、父は試合で<sup>⑫</sup>会心のショットを決めると、応援<sup>おうえん</sup>しているぼくたちにむかってポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があつた。

「<sup>⑬</sup>太二、わかつたよ。おれもチョキにするわ」

久保はそう言つてグーをチョキにかえると、とがらせた口から息をはいた。

「なあ、武藤。グーパーじゃんけんはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるをかくすように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、武藤はにぎっていたこぶしから人差し指と中指をのばすと、ぼくにむかつてその手をつき出した。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョキにかえて、

輪の中にさしでした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めよう。時間もないし、今日はチョキがブラシをかけるよ」  
そう言つて、ぼくが道具小屋に入ると、何人かの足音が続いた。ふり返ると、久保と武藤と末永の後にも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をする間、だれも口をきかなかつた。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシがはなれないように歩幅ほはばをあわせて歩いていると、昨日からのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人はおおまたでブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅をせまくしてきれいな弧こをえがき、直線にもどれば二人ともがまたおおまたになつてブラシを引いていく。

ぼくたちはこれまでよりも強くなれるだろう。チーム全体としても、もっともつと強くなれるはずだ。

『大きくなる日』佐川光晴

問一 ―― 部① 「みんながなにをしようとしているのかはわかった」とありますが、みんながどういうことをしようとしていると太二は思ったのですか。四十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問二 ―― 部②・⑤・⑥・⑩・⑪のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

問三 ―― 部③・④に当てはまる言葉を次のの中から選び、記号で答えなさい。

ア あるいは イ しかも ウ だから エ ただし オ もし

問四 「二」にえがかれている出来事があつた日の、ぼくの気持ちとして最も適当なものを、次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 久保は超まじめでかけひきしないと思っていたのに、信用できないやつだと怒りを感じている。

イ いいかげんで言いわけの多い末永に非があり、武藤の行動はまちがっていないと思つている。

ウ 自分だけいい子ぶつた行動をとり、みんなの反感を買つたかもしれないと心配している。

エ 武藤の末永に対するひどいやり方に失望し、武藤のことを信頼しんらいできなくなったと思つている。

オ 友だちの悪だくみに気づきながら行動を共にしてしまい、自分はいくじがないと思つている。

問五 ―― 部⑦ 「ぼくはようやく自分のするべきことがわかつた気がした」とありますが、ぼくはどういうことをするべきだと考えたのですか。文中の言葉を使って十五字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問六 ―― 部⑧ 「自分の甘さに腹が立つた」とありますが、「自分の甘さ」とはどういうことを指していますか。文中の言葉を使って六十字以内で書きなさい。(句読点は字数に入れません。)

問七 ―― 部⑨ 「だれの顔も緊張で青ざめている」とありますが、末永以外の二十三人と末永がこのような様子である理由を、解答らんに合うように、それぞれ二十字程度で文中からぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

問八 ―― 部⑫ 「会心」の言葉の意味を説明した次の文の□部に当てはまる言葉を、漢字二文字で書きなさい。

心から□すること。

問九 ――部⑬「太二、わかったよ。おれもチヨキにするわ」とありますが、

(1) 太二が出したのはチヨキだと久保は言っていますが、ぼくはどういうつもりでチヨキを出したのですか。文中から十字以内でぬき出しなさい。(句読点は字数に入れません。)

(2) 久保は、太二がどのように考えてチヨキを出したと思ったのですか。適当でないものを次のア～オのうちから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 久保は、太二が自分ひとりでコート整備をしようと考えてチヨキを出したと思った。

イ 久保は、太二がだれかひとりをハメることを止めたいと考えてチヨキを出したと思った。

ウ 久保は、太二が、末永がひとりになるのをさけたいと考えてチヨキを出したと思った。

エ 久保は、太二が緊張しているみんなの気持ちをほぐそうとしてチヨキを出したと思った。

オ 久保は、太二がグーパーじゃんけんをやめようと言いたくてチヨキを出したと思った。

問十 本文の内容に合うものを次のア～キのうちから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 武藤はテニス部を強くしていこうとリーダーシップを發揮し一目置かれているので、反論する同級生はいなかった。

イ 末永はいつもしんどいことから逃げて楽をしようと考え、今回もやるべきことをやらずに途中で投げ出してしまった。

ウ ぼくは自分のしたことを反省し、クラブのためにどうすればよいかやみ、何とか解決しようと必死で考えた。

エ 久保は一本気で自分のことより友だちのことを考え、まちがっていると思うことには前後を考えずに立ち向かっていった。

オ 武藤は自分の行動を後悔していたので、久保の言葉をきっかけに、末永に向かってすなおにあやまることができた。

カ ぼくたちは最後には不安な気持ちや部員に対する不信感が消え、一緒にテニスが続いていこうという気持ちを強くした。

キ ぼくは人の心を傷つけるようなことをしたくはないが、友だちとの対立はさけたいので仕方がないとあきらめていた。